

研究論文

海外大学への進学を選択するプロセスに関する
予備的考察

(高校交換留学体験者が英語圏に進学する場合)

岩本 綾^AA Preliminary Study of the Process by Which
Japanese High School Students Choose
an Overseas University
(Cases in Which Overseas Exchange Program Alumni Go to
an English-Speaking-Country)Aya IWAMOTO^A

Abstract: The purpose of this study is to explain the process by which Japanese high school students who had already experienced an overseas exchange program chose a university in an English-speaking-country. 10 university students who had already participated in an exchange program and then had considered spending their whole university life abroad were interviewed. The data were then analyzed with the Modified Grounded Theory Approach. The process was explained as follows: they had developed an image of their future selves through their exchange experiences, especially through the interactive classes they had experienced during the exchange program, and feeling that they would be limited by the learning culture in Japan, had determined that studying abroad for university would help them attain that image.

Keywords: study abroad, overseas exchange program during high school, university choice, English-speaking-country, M-GTA

1 はじめに

1.1 研究の背景

日本の高校卒業後、英語圏をはじめとした海外の大学等に進学する「海外進学」への関心が急速に高まっている。横田は2012年の段階で、「数年後には中国や韓国と同様に海外進学が市民権を得てくるだろう」というベネッセコーポレーションの予測を紹介している¹⁾。2014年には、サンデー毎日と大学通信が全国の100の進学校を対象に、海外進学に関する初めての調査を行った²⁾。2017年には、東京大学合格者数トップの開成高校が、前年の3倍となる21名の海外大学合格者を出したと、同年6月の日本経済新聞の記事の中で紹介されている³⁾。

政府の「グローバル人材育成戦略」は、「海外の高校・大学への留学・進学を希望する中学生・高校生や保護者等に対する各種の情報提供や手続き面での助言等の支援を多様な主体が行う環境の整備方策を検討する」とし、海外進学をグローバル人材育成の1つの方策と位置づけている⁴⁾。これまで海外進学を支援する主体は、海外進学に力を入れる一部の私立高校や、それを専門とする塾が中心だったが、近年では都道府県による取り組みも見られるようになった(例えば熊本県⁵⁾)。

一方で、進学先として海外の大学が検討されるということは、高校での進路指導がますます多様化するということである。これまでも入試の多様化に対応を迫られる高校教員の苦勞が指摘されてきた。リクルート進学総研が全国の高校の進路指導主事等を対象に行った調査では、9割以上が進路指導を「非常に難しい」

A: 信州大学全学教育機構

または「やや難しい」と感じ、特に大学・短大への進学率が70%以上の高校では、「入試の多様化」がその最大の要因であるという⁶⁾。海外進学者もいる高校で進路指導を担当する高崎は、現状では「海外進学を希望する生徒や家庭の受け皿として学校が機能していない」と指摘し、「常に生徒のそばにいる教員が手順を知り、対応できる環境を構築することこそ、海外進学者数の増加を支える第一歩」だと述べている⁷⁾。背景には日本の高校教員のほとんどが自身では海外進学を体験していないという事情がある。

高崎は、出願までの手順に関して教員が知っておくべき点をまとめている⁷⁾。確かに手順を知ることは重要だが、高崎自身が述べるように「今後、漠然と相談してくる生徒に対応するためには、教員自身が基本的な知識を持つことが必要」⁷⁾であり、より基本的な知識としては、まず、高校生が海外進学という選択をなぜ、どのように行っていくのか、という高校生の視点に立った進路選択プロセスの理解が不可欠であろう。手順を知ることが、情報化によって以前ほど難しくない。しかし、海外進学を選択すべきかどうか、生徒と一緒に考えることは「常に生徒のそばにいる教員」だからこそ果たせる役割である。本研究はそのための一助となるような資料を提供したい。

1.2 海外進学を選択するプロセスに関する先行研究

本研究では海外進学を「日本の高校卒業後、学位取得や卒業を目的として海外の高等教育機関に進学すること」とする。短期間の日本の大学への在籍や、海外の語学学校・語学コース等、またアルバイト・インターンシップ等を経て海外進学したケースも含む。

海外進学は「進学」であって「留学」ではないという捉え方もある⁷⁾が、本研究では「進学」であり「留学」でもあると考える。留学は「よその土地、特に外国へ行って、ある程度長い期間勉強すること」⁸⁾で、期間や学位取得の有無によらず、「外国へ行って勉強すること」を指す。一方進学は、「上級の学校へ進むこと」⁹⁾である。本研究では、高校生が海外進学を選択していくプロセスには、進学および進学先を決める進路選択のプロセスと、海外留学を決意するプロセスの両方が関わっているものと考え。本節ではそれぞれの先行研究を概観する。

1.2.1 高校生の進路選択プロセス

高校生の進路選択の規定要因には、「内的な心理的要因（個人の興味や能力・価値）」と「外的な現実的・環境的要因」が存在する¹⁰⁾。前者は主に教育心理学や発達心理学などの心理学的アプローチによって研究が進められ、自律的な進路選択をするために必要な意欲・態度や能力を見極めて、それを育てることに関心を向けている（例えば「進路成熟」¹¹⁾¹²⁾。一方後者は、主に教育社会学で探求が重ねられている。そこでは学校の進路分化装置としての機能に注目し、学校間や学校内には学力水準に基づいて形成される層（トラック）が存在すること、それが生徒の進路選択の機会と範囲を限定するメカニズムとして機能していることが指摘されてきた¹²⁾。これらの研究は、高校生の進路形成がどのような要因によって規定されるのかを明らかにしてきたが、なぜ、どのように進路選択をしていくのかという進路選択行動を高校生の視点に立って説明しようとするならば、各要因の解明だけでは十分でない。

応用社会心理学研究所は15年間にわたる調査を元に、高校生がどのようなプロセスで大学を選択しているのか、高校生の行動を「意味的に理解して説明できる『モデル』」の必要性を指摘している¹³⁾。「意味的に理解」とは、進路選択過程では多様な進学活動が見られるが、その活動の意味するところは個人によって異なる（例えば、オープンキャンパスになんとか参加する人もいれば、大学選択の最終段階として参加する人もいる）ため、行動の意味からプロセスを説明する必要がある、ということを指す。図1は応用社会心理学研究所が提示した、高校生などの受験生の多くが入学する大学を決定するまでに経るプロセスである。

応用社会心理学研究所の示したプロセスは、先行研究が明らかにしてきた進路規定要因がどのように関わることには言及しておらず、各段階の記述はいわば骨子だけを示したものと見える。日本からの海外進学選択行動の説明として、図1のままでは参考にならないだろう。海外進学選択行動を説明するためには、より

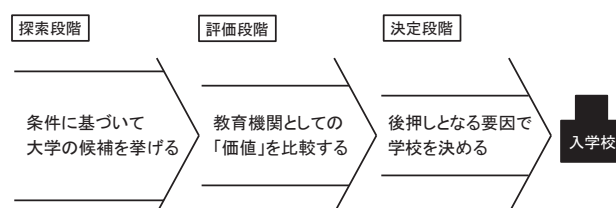


図1 「大学選び」のプロセスの3段階¹³⁾

具体的なレベルで、海外進学に特徴的な要因を含めてプロセスを描く必要がある。また、海外進学選択行動も図1と同じ骨子を持つプロセスであるかどうかを確かめることも必要である。

1.2.2 留学を決意するプロセス

海外進学を決める際に特徴的な具体的要因を説明に含めるとは、「留学」の側面に注目するということである。本項では、留学をなぜ、どのように決めていくのかという点に関する先行研究として、留学の動機研究および留学の促進要因・阻害要因の研究を概観する。

留学動機については進路選択ほどの研究の蓄積はない。留学動機研究の多くは、内的要因と外的要因を同時に扱う。例えば小柳は、在豪日本人留学生の留学動機として「学問キャリア専念型」「ドロップアウト型」「好奇心型」「現状脱出型」の4類型を見出している¹⁴⁾。「好奇心型」には内的要因が、「ドロップアウト型」には外的要因が強くなる¹⁵⁾。

留学生の出身国に関連する変数を意味する「プッシュ要因」と、留学生の受け入れ先国に関連する変数を意味する「プル要因」の枠組みを用いた留学動機の社会学的研究は、伝統的には外的要因の研究といえる。そこでは、発展途上国から先進国へ、南から北へ、周辺から中心へという、垂直的な留学生移動が起きていることが指摘されている¹⁶⁾。近年では嶋内は、日本と韓国にある大学・大学院の英語プログラムに正規留学した東アジア出身者のプッシュ・プル要因を明らかにした質的研究が注目される¹⁶⁾。嶋内は、従来言及されてきたような国家間のプッシュ・プル要因に加えて、東アジアというリージョナルなプル要因の存在や、「人とのつながり」が大きなプル要因となるケースなど、内的なものも含めてプッシュ・プル要因の多様化を指摘している。その中には、西洋英語圏への留学を断念した人の「セカンドチャンス」や「ステッピングストーン」として日韓の英語プログラムが選ばれるケースもあり、高等教育機関の世界共通のプル要因として、「西洋英語圏」が比較軸となる新たな動きがあるという。

留学動機研究に加え、近年では留学促進を念頭に、留学の促進要因や阻害要因を探索的に明らかにしようとする研究も行われている。例えば野口は、京都大学生を対象としたアンケートに基づき、留学志向との親和性が高い要因として、日常的外国語能力が高いこと、過去の留学体験、留学生から影響を受けていることな

どを挙げている¹⁷⁾。また、河合は「(専攻の)カリキュラムとの両立の難しさと単位交換の難しさ」等を留学の阻害要因として挙げている¹⁸⁾。このように、留学動機や、留学の促進・阻害要因は明らかにされつつある。しかし、現在のところ多様な動機や要因が列挙されているに過ぎず、学生・生徒が留学をなぜ、どのように決めていくのかというプロセスが解明されているとはいえない。また、高校生の海外大学進学に論点を絞った研究も見当たらない。

1.3 本研究の視座:過去の留学体験と海外進学の関係

海外進学選択行動を理解するためには、先行研究が明らかにした進路選択および留学決定に関わる要因を参考にしつつ、海外進学の場合の規定要因を具体的に捉えてプロセスモデルを描くことが必要である。その上でそれを図1の枠組みで整理できれば、海外進学を一般的な進路選択行動の中に位置づけられ、進路指導にも役立つと考えられる。

海外進学選択行動を表すプロセスモデルは、海外の大学が進学先の候補になることから始まるが、本研究は「なぜ、どのように」海外大学が候補になるのかまでを含めて説明しなければ、日本の高校生があえて海外進学を選択するという行動を理解できないと考える。嶋内は、過去の留学体験の中で出会った人や、母国で出会った留学生との「人とのつながり」が留学先を決める大きなプル要因になっていると指摘する¹⁶⁾。また野口も、過去の留学体験や留学生から影響を受けていることは留学志向と親和性が高いとしている¹⁷⁾。前節で見た留学決定に関連する要因の中でも、過去の留学関連体験は特に説明力のある要因の1つと考えられ、海外進学でも過去の留学関連体験がきっかけになっているケースが少なくないと予想される。

ここでもう一步進めて考えたいのは、過去の留学関連体験がなぜ次の留学を促すのかという点である。嶋内の指摘する「人とのつながり」以外の点でも、過去の留学関連体験が次の留学を促している可能性がある。両者をつなぐ要因を明らかにすることで、海外進学選択行動をさらに深く理解できると考えられる。

本研究では、海外進学選択行動をより深く理解するために、高校時代に留学体験がある人に絞ってその海外進学選択行動を検討する。もちろん、高校時代に留学をしていない人で海外進学をする人もいる。その場

合には別のきっかけで海外の大学が進学先の候補となっていると考えられ、その海外進学選択行動は高校留学を経て海外進学を考えるようになった人とは異なるプロセスになると考えられる。例えば、国際バカロレアの認定校で海外進学への進路指導もあるバイリンガルコースの高校生の場合¹⁹⁾と、日本の一般的な高校から10ヶ月間留学し、帰国後海外進学を目指す高校生では、異なる説明が必要になる。それらを全て一緒に論じると、全体的な傾向を捉えられる一方で、海外進学選択行動の説明が抽象的になり、実際の進路指導には役立ちにくくなる恐れがある。高校生の海外進学選択行動を説明する多様な視座の中で、本研究は特に高校時代の留学体験との関連で説明を試みるものである。

2 研究課題

本研究の課題は、高校交換留学体験者が英語圏の大学への進学を決めていくプロセスを説明することである。その目的は、進路指導を担当する教員などが高校生の海外進学選択行動を理解する際の一助とすることである。以下では、高校での留学体験を「高校交換留学」のみに絞った理由と、海外進学先を「英語圏の大学」に絞った理由を説明する。

高校留学は交換留学²⁾と私費留学に大別される(表1)。高校交換留学者数は公表されていないが、平成27年度に3ヶ月以上の留学をした高校生は4197名で²⁰⁾、交換留学は高校留学の約6割を占めるとされる²¹⁾。

本研究は海外進学を支援する立場に立つ。過去の留学関連体験が海外進学を促すならば、高校時代に留学を勧めることは海外進学者増加の一助となろう。高校留学は多様化しており、その体験内容にはばらつきがあるが、交換留学は私費留学よりも費用や手続きの面で全国の生徒がアクセスしやすく、教員も生徒に比較

的勧めやすいと考えられる。そのため、本研究では交換留学に絞って検討することにした。

次に、「英語圏の大学」への進学に絞った理由を説明する。日本の高校生の海外進学先は現在のところほとんどがアメリカ、イギリス、オーストラリアなど英語圏の大学である²²⁻²³⁾。したがって、そのような状況の中で進路指導に当たる教員がまず理解しておく必要があるのは、高校生が英語圏の大学への進学を選択していく行動である。嶋内¹⁶⁾は、「友達みんな聞きますよ。なんでイギリスやアメリカに行かなかったの？(中略)って。」という、韓国の大学の英語プログラムに留学した調査対象者の発言を紹介しており、ここから非英語圏への進学を選択する行動は英語圏への進学を選択する行動と異なる点があることがうかがえる。海外進学の多様な側面を理解するためには、両者を分けて検討するべきであろう。

3 研究方法

本研究は、高校交換留学体験者の英語圏の大学への進学選択プロセスを説明するという研究課題に対して、インタビュー調査およびそのデータの質的分析という方法でアプローチする。本研究では、高校生の進路選択の現場において研究成果を活用できることが重要であると考え、高校交換留学後に英語圏への大学進学を選択する高校生の視点で、そのプロセスを丁寧に描き出すことができる研究方法を選択する必要があると考えた。量的アプローチは理論的仮説の検証を目的とする研究に適しており、数量的一般化を目指す。本研究は領域密着型の理論を構築する探索的研究であり、目的が異なる。海外進学選択の規定要因を具体的に捉え、そこからプロセスモデルを描き出そうとする本研究には、質的アプローチが適していると考えた。

表1 交換留学と私費留学の違い²⁴⁾

交換留学		私費留学
海外で地域生活を体験し、異文化に対する理解を深めること	目的	海外の教育システムで、興味のある分野の知識や技術を伸ばすこと
国の希望を出すことはできる。配属地域や学校・学年、家庭は選べない	留学先の国・地域	選べる
現地の一般家庭にホームステイ(無償)	滞在形態	寮滞在または現地の一般家庭にホームステイ(有償のケースが多い)
1学年間(約10か月) 出発日・帰国日は交流団体 ¹³⁾ が指定	期間	選べる
プログラム参加費は120～160万円	費用	寮滞在で450万円以上、ホームステイで300万円以上(目安)

3.1 調査対象者

対象者は、高校時代に交流団体 X の高校交換留学プログラムに参加し、その後英語圏の大学⁴への進学を検討した 10 名の大学生（調査時）である（表 2）⁵。内訳は実際に海外進学した人は 6 名、検討したが最終的に国内進学を選んだ人が 4 名である。4 名の国内進学者は、途中まで海外進学者と同様のプロセスをたどっており、彼らを含めて分析することで海外進学選択のプロセスがより多面的に明らかになると考えた。調査対象者の卒業時において、卒業高校の中に海外進学に力を入れている高校はなかった。対象者の募集は以下のように行った。まず交流団体 X からインタビューに協力を得られる人の紹介を受けた。さらに、紹介された対象者に、インタビューに協力を得られる人の紹介を依頼し、対象者を増やした。また、後述するオリエンテーション等で知り合った人にも協力を依頼した。

3.2 調査対象者と調査実施者との関係

調査実施者は筆者である。筆者は 2013 年から交流団体 X に調査協力を得ており、本調査以前にパイロット的なグループインタビューや、交流団体 X が高校生向けに実施するオリエンテーション等の見学を行った。また、交流団体 X の担当者と面談を重ね、高校交換留学について理解を深めた。本調査の対象者には、オリエンテーション等で知り合った 2 名が含まれるが、その他の 8 名は筆者と事前の面識はなかった。そのため、事前のメールのやり取りやインタビュー冒頭の時間を使って、信頼関係の構築に努めた。また、筆者の意図に沿った発言がされないよう、言葉の使い方には注意を払うとともに、インタビュー終了後には感想を求めて、対象者の本意を確認した。さらに、発言の趣旨が

不明な点、追加の質問などがあれば、後日対象者にメールで問い合わせた。これらのことから、率直で詳細なデータを収集することができたと考えている。

3.3 データの収集方法

10 名それぞれに対して、2013 年秋から 2015 年秋の間に 1 回ずつ、1 対 1 の半構造化インタビューを行った。1 名当たりの平均所要時間は 131 分であった。インタビューでは、高校交換留学中および大学入学後の成長体験をそれぞれ 3～5 つ程度挙げてもらうことを中心に、帰国後の生活や大学進学に至る過程などを自由に話してもらった。大学進学に至る過程については、各調査対象者の語りの流れを遮らないようにしつつ、「なぜ海外進学しようと思ったか」「日本の大学ではだめだったのか」「親や周囲の反応はどうだったか」「将来ビジョンはあったか」「入学前の想像と違っていったことはあるか」などを質問した。インタビューは許可を得て録音し、逐語録を作成した。

3.4 データの分析方法

分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた。1960 年代にグレーザーとストラウスによって考案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）は、ボトムアップで領域密着型理論を生成しようとする研究法で、M-GTA はそれをより実践しやすいよう、分析プロセスの明確化を図ったものである²⁵。M-GTA で最終的に生み出されるのは、「人間集団の行動に関する説明と予測を可能にする理論である」²⁶。本研究において「人間集団」は「英語圏の大学への進学を検討する高校交換留学体験者」であり、彼らが英語圏の大学への進学を決めてい

表 2 調査対象者一覧

仮名	性別	留学派遣先	出身地	派遣時	帰国時 ^[6]	進学先	大学専攻	調査時学年
月子	女	ベルギー	関東	高3	進級	米・州立大	美術	4
哲也	男	アメリカ	中部	高3	原級	米・リベラルアーツカレッジ	経済学, 数学	2
亨	男	アメリカ	関東	高1	進級	米・リベラルアーツカレッジ	映画・メディア研究	3
尚之	男	チリ	近畿	高2	原級	米・リベラルアーツカレッジ	経済学	2
仁奈	女	アメリカ	関東	高3	原級	米・リベラルアーツカレッジ	音楽	2
典子	女	アメリカ	中部	高2	進級	米・コミュニティカレッジ	未定	1
夏帆	女	中国	近畿	高2	進級	日・私立大	観光	4
春樹	男	アメリカ	関東	高2	進級	日・私立大	経済学	4
貴広	男	アメリカ	関東	高2	進級	日・私立大	法律	4
千夏	女	アメリカ	近畿	高2	原級	日・私立大	コミュニケーション	4

くという行動を、インタビューデータに根ざして説明・予測しようとするものであるため、M-GTA が分析方法として最適であると判断した。

M-GTA における理論は、「概念」や「カテゴリー」を相互に関連づけることで構成される。「概念」とは分析結果を構成する最小単位で、データに密着した分析から生み出される。「カテゴリー」とは概念間の関係を一言で表したもので、「概念」よりも抽象的である。分析の手順としては、1) 分析テーマを設定する、2) インタビューデータから説明力のある概念を生成する、3) 各概念間の関係を検討し、必要に応じてカテゴリー化する、4) 概念やカテゴリー間の関係を図とストーリーラインで表す、であり、実際には1)～4)の間を行きつ戻りつしながら分析を深めていく。本研究の分析テーマは、「高校交換留学体験者が英語圏の大学への進学を決めていくプロセス」とした。

1)～4)の継続的な分析作業は、「理論的飽和」に至った段階で終了させる。その判断は、①データの範囲、②分析の完成度の2点から行う²⁵⁾。本研究では、①について、分析が進むにつれて概念がまとまり、10番目のインタビューデータからは新たに重要な概念が生成されなかったため、「英語圏の大学への進学を検討する高校交換留学体験者」という範囲の進路選択プロセスを説明する上では、十分な具体例を得たと判断した。②については、分析の過程でM-GTA研究会のスーパーバイザーに継続的に意見を求めるとともに、交流団体Xの担当者とも面談を行い、分析結果に対して別の視点を提示してもらうなどして、分析の完成度を高め

た。これは、独断的な解釈を防ぐことにも役立った。

4 結果と考察

以下ではまず、分析結果の全体の流れ(図2)を、概念(〈 〉)とカテゴリー(《 》)を用いて説明する。続いて4.1～4.4では各カテゴリーを構成する各概念について、インタビューデータを用いて説明する。なお、「留学体験者」とは高校交換留学体験者を表す。

まず、図2について述べる。高校交換留学体験者が英語圏の大学への進学を決めていくプロセスは、《高校留学での手応え》を感じたことから始まる。彼らは〈再留学再成長を確信〉しており、進学にあたり〈英語圏なら国際的将来像に近づける〉だろうと考えている。また、高校留学を通して深まった〈英語圏生活への自信〉もそれを支える。とはいえ、大学4年間を海外で過ごすと考えれば〈日本的大学生活の欠落感〉を意識せざるを得ず、〈国内就職不利への懸念〉も生まれてくる。さらに、〈英語圏生活への自信〉があっても、入学できるのか、授業についていけるのかという〈入学・授業への不安〉はあり、《高校留学での手応え》と《英語圏進学へのためらい》の間を揺れ動く。

進学先についての具体的なリサーチを進める中で、彼らは英語圏の大学の、特に〈能動的学習環境に憧憬〉を覚える。また、能動的に勉強する対象はじっくり選びたいと〈専攻柔軟性を重視〉するようになる。そのような特徴を持つ国内の大学も検討するが、〈勉強しない国内大学生への違和感〉や日本式の〈暗記型学習文化への諦め〉から、結局《国内では不十分と判断》す

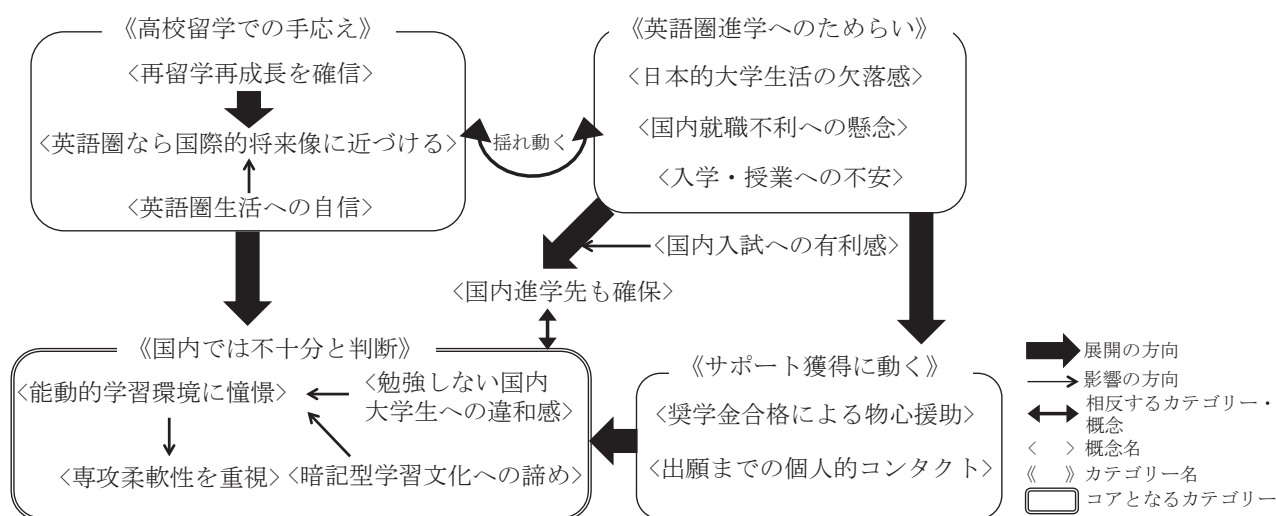


図2 高校交換留学体験者が英語圏の大学への進学を決めていくプロセス

る。一方、《英語圏進学へのためらい》は、2つの方法で軽減が図られる。1つはAO入試など<国内入試への有利感>から、<国内進学先も確保>することである。《国内では不十分と判断》と一貫しないが、結果的に英語圏進学へのチャレンジを後押しする。もう1つは<奨学金合格による物心援助>や<出願までの個人的コンタクト>といった《サポート獲得に動く》ことである。こういったサポートが《国内では不十分と判断》することをいっそう促し、英語圏への進学を進める。

4.1 《高校留学での手応え》

高校交換留学体験者にとって交換留学は、異文化を相対化し、自信を強化する10ヶ月間である²⁴⁾。高校留学で成長した手応えを感じた留学体験者は、ここで英語圏の大学に進学すればさらに成長できる、と考えるようになる。「アメリカでいろんな国の人と会って、すごい世界を見ることができたので、大学入ってもできればそれを続けていきたいなって思った」(哲也、アメリカ)(名前は全て仮名で、国名は高校交換留学での派遣先を表す。以下同様)「高校1年間では足りないな」と(春樹、アメリカ)といった発言からは、そのような<再留学再成長を確信>する姿が見て取れる。

英語圏の大学に進学してさらに成長することで、彼らは<英語圏なら国際的将来像に近づける>と考える。高校留学中の現地の人々との関わりやそれと関連する帰国後の体験は、各々がもともと持っていた関心を刺激し、その結果彼らは海外を舞台にするような将来像を描くようになる。そこに近づくには英語や海外体験がもっと必要だと考えて英語圏の大学への進学を志すのである。例えば、春樹(アメリカ)がアメリカへの進学を考えるようになったのは、日本を代表するメーカーが叩かれる姿を留学中に目にしたからであった。

日本の企業がアメリカの議会に呼ばれたりした時に、今度はうまく立ち回れるように、(中略)ちゃんと分かっている人が必要なんだろうなって。(中略)もっとアメリカの文化といいますか、社会的な規範みたいなのを勉強して、(中略)日本の産業を手助けできるようになっていう、そういう人材が必要だし、そういう人材になりたいなと思った(春樹、アメリカ)

英語圏の大学で自分はさらに成長できる、それで将

来像に近づける、という前向きな見方は、<英語圏生活への自信>に支えられている。彼らは高校留学中に現地の人々と人間関係を築くことに成功しており、それは次の英語圏での生活に大きな自信を与えている。

最終的に高校でもまあ自分なりにやれるなあって思ったのと、これだったら、まあ英語力もそれなりについてきたので、(アメリカの大学に)行ってもいいのかなって思いましたね。(哲也、アメリカ)

自信を持つのは、高校留学で英語圏に派遣されていた体験者だけではない。尚之(チリ)はスペイン語を身につけたこと、および未知の国で家庭・学校生活を送ったことから<英語圏生活への自信>を持っていた。

1回スペイン語でぐり抜けてきたような自信もあるし、(中略)割と元々の言葉の枠組みとしては、(スペイン語は)日本語よりは(英語に)全然近いじゃないですか(尚之、チリ)

よく分かんないところに行くのは、多分誰もそんな簡単にできることじゃないかなと思うんですけど、そういうのにどんどん、ズバズバ行けるようになったっていうのが、自分の中では結局留学を通して大きかったのかなと思います(尚之、チリ)

このような、高校留学時の現地の人々との関わりに基づいた《高校留学での手応え》が、英語圏への進学を検討する発端となる。

4.2 《英語圏進学へのためらい》

《高校留学での手応え》があるとはいえ、4年間を海外で過ごすとなれば、やはりためらいもある。例えば、「やっぱり日本の大学での学生生活を経験したかった」(亨、アメリカ)といった発言には、日本人の多くが体験する大学生活を自分は体験しないという不安、すなわち<日本的大学生活の欠落感>が見え隠れする。

<国内就職不利への懸念>はより深刻で、親や先輩から、海外大学への進学が日本での就職や仕事を不利にする可能性を聞き、自分でも心配するようになる。例えば春樹(アメリカ)は、アメリカの大学を卒業して日本で就職した先輩から、海外進学した人が日本で働

く場合には日本の社会に適応することが重要だという話を聞いた。

自分は、アメリカ高校留学して、そういうふうになつて（筆者注：日本のやり方はおかしいと思うように）なつて帰ってきてるなど。アメリカにまた大学4年間行ったら、もっとそれが強まって帰ってくるかもしれない。自分の最終的なゴールとしては、日本社会についていう気持ちがあるので。あ、そうか、うまくいかないかもしれないんだなつていうことを思ったんですよね。（春樹、アメリカ）

このように、＜英語圏なら国際的将来像に近づける＞と期待しつつも＜国内就職不利への懸念＞も感じるというジレンマは、各人の将来像によって感じ方の程度が異なる。例えば、国際機関で働きたいと考えていた哲也（アメリカ）や企業への就職を考えていなかった月子（ベルギー）はこれについて発言しておらず、特に大きな懸念ではなかったと考えられる。ただ、実際の進路指導の場面を想定すると、このようなジレンマに陥った生徒が教員に相談に来ることは十分に予想できる。＜国内就職不利への懸念＞を含めて海外進学選択プロセスを理解しておくことで、生徒の相談にも適切に応じられると考えた。ところで、仁奈（アメリカ）は「アメリカで4年間勉強したつていうことは高校留学に比べるとずっと有利になつちゃうつて思います」と、英語圏進学が日本での社会的評価を高めるとの見方を示している。就職に限定した発言ではないものの、＜国内就職不利への懸念＞とは対極的であり、注目される。ただし、今回の他の調査対象者には類似の発言が確認できなかったため、概念化は見送った。

一方＜入学・授業への不安＞はより広く共有された概念である。＜海外生活への自信＞があるにもかかわらず、そもそも入学できるのだろうか、英語面で授業についていけるのかという漠然とした不安を持つことを表す。千夏（アメリカ）は次のように述べ、これを英語圏の大学への進学を断念した理由の1つとしている。

日常会話とかはペラペラしゃべれてもアカデミックになったら絶対、違うというのもあつたし、アメリカの大学つて、日本の大学と違って勉強だけできても入れてもらえないというのを聞いて。（千夏、アメ

リカ）

また実際に海外進学した亨（アメリカ）も、「経済的に学費がどうか、实际的に、英語、語学的についていけるのとか、あと試験があつたりとかもあつたので、英語圏に進学したいという思いがすぐに実行に移されたわけではないことを述べている。このような《英語圏進学へのためらい》は、主に高校交換留学から帰国後、日本の生活の中で生じる。英語圏への進学を検討する彼らは、《高校留学での手応え》と《英語圏進学へのためらい》という相反する思いの間を揺れ動く⁸。

4.3 《国内では不十分と判断》

高校交換留学体験者が英語圏の大学への進学を決めていく際にコアとなるのは、《国内では不十分と判断》することである。それがなければ、《高校留学での手応え》を強く感じて、また《英語圏進学へのためらい》が解消されても、英語圏進学を決意することはない。

《高校留学での手応え》と《英語圏進学へのためらい》の間を揺れ動きながらも、彼らは進学先を具体的に考え始める。その中で彼らは、英語圏の大学にある＜能動的学習環境に憧憬＞を抱く。すなわち、これまでの体験から推測したり説明会などで聞いたりして、英語圏の大学では少人数で能動的な勉強ができそうだと判断し、ぜひ進学したいと考えるようになる。例えば、夏帆（中国）は高校交換留学中、ヨーロッパ出身の他の留学生たちと毎日過ごし、ディスカッションで刺激し合いながら多面的な理解を進めていくという彼らの学習方法に魅力を感じて英語圏進学を希望した。

ヨーロッパの子たちの影響がすごく大きくて、私にとっては。私はもっと考えたいなつて思つて。その興味のあることをどんどんどんどん考えて、議論して何か新しいものが生まれてみたいな。そんな勉強がしたいなつて思つたんですね（夏帆、中国）

夏帆はヨーロッパであれば望むような学習方法で勉強できると考え、はじめにイギリスへの進学を考えた。

こうした能動的な学習は、夏帆の発言にもある通り、「興味のあること」に対してこそ行いたい。だとすれば、専攻選びは重要である。＜専攻柔軟性を重視＞は、入学時に専攻を1つに決めることは難しいと感じているた

めに、英語圏の大学では制度的にその必要がないことを知って、その点にも英語圏進学の魅力を感じることである。美術、生物、英語と「いろんなことに興味があった」という月子（ベルギー）は次のように述べた。

（アメリカの大学では）美術専攻でやっていても、やっぱり天文学勉強しようかなと思えば、紙1枚でふいっと変えられるんですよ。だからそういうシステムを知ったときに、（中略）すごく、あ、いいなって。（月子、ベルギー）

ところで、能動的な学習環境を備え、＜専攻柔軟性を重視＞する大学は日本にもある。英語圏進学を検討する高校交換留学体験者も、そのような国内の大学を知らないわけではない。

A 大学とか B 大学は、英語も使えるし、海外留学とかもできそうだし、C 大学とかだったらリベラルアーツっていうんで、いろんな科目を勉強できるっていう点でも魅力を感じてた（亨、アメリカ）

しかし、リサーチを進める中で、彼らは結局《国内では不十分と判断》するに至る。

アメリカのリベラルアーツの大学と比べたら、確立してないというか、自分が入っても、結局不満になっちゃうんじゃないかな、満足いかないんじゃないかな、っていうふうに感じた（亨、アメリカ）

このような判断、特に英語圏の＜能動的学習環境に憧憬＞を強める結果に少なからず影響を及ぼすのが、＜勉強しない国内大学生への違和感＞である。彼らは、勉強していない大学生から大学生活の話を聞き、それが日本の大学生活であると一般化して受け取る。例えば高3で高校留学した哲也（アメリカ）は、元クラスメイトが既に進学していたため、話を聞いた。

サークル活動、劇団やってるらしいんですけど、それが忙しいあまり留年するみたいな話をきいて。これちょっと違う、自分の求めるものと違うなあって（哲也、アメリカ）

日本の大学に進学した友達みんな、ほんとに日本の大学つまらないって言って、あ、そうなんだって思ってしまった（哲也、アメリカ）

さらに、＜暗記型学習文化への諦め＞も、＜能動的学習環境に憧憬＞を抱く気持ちを強める。＜暗記型学習文化への諦め＞とは、高校留学前や帰国後に体験した暗記中心・講義中心の勉強方法や受験勉強を元に、日本が暗記型の学習文化を持つことに気づき、大学でも同じような授業が行われると予想して日本の大学への評価を下げることである。夏帆（中国）は、「大学でどんな勉強ができるんだろうって考えたときに、大講義室でただただ聞いてただただ単位を取って卒業していくのか、私、みたいな感じで考えた」と、日本の大学に対して期待が持てなかったことを語っている。

このように、彼らの英語圏進学への希望は国内の大学へのマイナス評価の影響も受けながら固まっていく。

4.4 《サポート獲得に動く》・＜国内進学先も確保＞

国内では期待通りの学生生活が叶わないために英語圏に進学するという判断は、《サポート獲得に動く》ことによって後押しされる。これは《英語圏進学へのためらい》を解消するための行動で、この筆頭に挙げられるのは、学費などの経済的問題を解決しようと奨学金を得ることである。しかし、奨学金は経済的問題だけを解決するわけではない。すなわち、奨学金に合格したことで英語圏進学への自信がついたり、奨学金団体のOBから出願にあたってのアドバイスを受けたりしたことが、英語圏への進学をさらに促していたのである。このような＜奨学金合格による物心援助＞について亨（アメリカ）は次のように語っている。

Y（奨学金団体）のサポートはすごく大きくて。リベラルアーツの大学っていうのを勧めてくれたことをはじめとして、学校ごとに興味を持ち始めたら、その学校に通ってる学生とか、その卒業生とかに連絡先教えてくれて、質問を送ったりとか。（亨、アメリカ）

《英語圏進学へのためらい》で感じた不安や懸念を払拭するために、体験者に質問したいと思っても、身近にはなかなか海外進学者がいない。質問に答えてくれる

人を奨学金団体が紹介してくれるというはからい、奨学金と同様、彼らの背中を強く押すものであった。

同様に、＜出願までの個人的コンタクト＞は出願する大学を絞ったり、出願書類を整えたりする際に、体験者や専門家に1対1でサポートしてもらうことである。海外大学への出願や入学手続きという実際的かつ重要なステップをクリアするため、彼らは最近進学した先輩などに直接アプローチする。哲也（アメリカ）は、「フェイスブックで見つけて、あーって思って何度もメッセージ送ったりしても返してくださったりした先輩もいた」と振り返っている。

一方、《サポート獲得に動く》とは別の方法で《英語圏進学へのためらい》を解消しようとすることもある。それは、英語圏への進学をほぼ決意しながら＜国内進学先も確保＞するという方法で、「合格したら入学して、8月までは行って、そこで休学（筆者注：退学）して、アメリカの大学に行こうと思ってた」（春樹、アメリカ）のようなケースである。春樹は日本での就職活動を見越して、「日本の大学に入れる能力を持った人材」だということを国内大学の在籍実績によって証明するために、まず国内の進学先を確保した。また、亨（アメリカ）は「いろいろ日本での大学生活について経験」するために、典子（アメリカ）は「一応日本に残ったときのことを考えたときに、まあそこには行こうと思って」、国内の進学先を確保した。

この行動の背景には、高校留学体験があることやそこで伸びた英語力によって、留学前に考えていたレベルの国内大学に合格しやすくなったと考える＜国内入試への有利感＞がある。AO入試をはじめとする多様な入試で合格できる見込みがあるために、＜国内進学先も確保＞しておこうとするのである。＜国内進学先も確保＞するという行動は、《国内では不十分と判断》することと一致しないのだが、＜国内進学先も確保＞して《英語圏進学へのためらい》を解消し、安心感を得ることで、結果的に英語圏進学への挑戦が促されている。

5 総合考察

5.1 理論的示唆

分析結果を図1の枠組みで整理する。高校交換留学体験者が英語圏の大学への進学を決めていくプロセスには、《高校留学での手応え》から英語圏の大学への進学という選択肢が浮上し、《英語圏進学へのためらい》

を感じつつ国内と海外の両方のリサーチを行う「探索段階」、それを元に《国内では不十分と判断》する「評価段階」、《サポート獲得に動く》ことや＜国内進学先の確保＞によって英語圏進学が後押しされる「決定段階」という3段階があるといえる。図1の枠組みは海外進学選択行動を説明する場合にも有効であった。以下では本研究が新たに明らかにしたことを述べる。

第1に、高校交換留学体験者が英語圏への進学を決めていくプロセスにおいて最も重要なのは、「評価段階」である《国内では不十分と判断》することであった。ここでは、個別の大学ではなく、「英語圏の大学」と「国内の大学」が対比的に捉えられた結果、《国内では不十分と判断》されていた。また、国内大学の候補を挙げる際には、英語の授業や留学制度の充実（春樹、アメリカ）や、リベラルアーツであること（亨、アメリカ）のように、アメリカの大学の教育環境に近い点が評価の対象となっていた。ここにかがえるのは、嶋内の指摘する「西洋英語圏という比較軸」¹⁰⁾の存在である。

《国内では不十分と判断》することが海外進学の決め手になるのは、おそらく高校交換留学体験者だけではなく、留学非体験者の場合も同様だろう。その中で高校交換留学体験者の海外進学選択プロセスを特徴づけるのは、《国内では不十分と判断》する材料が高校留学に由来するものであるということである。大学生活を通して十分に成長し、目指す国際的将来像に近づけるかと考えたとき、高校留学で体験したようなディスカッションベースの「考える」授業を多く提供する英語圏の大学は魅力的であった。また、日本が暗記型学習文化を持っていることに気づいたのも、高校留学で異なる形態の授業を体験したからであった。このように、彼らは高校留学の影響を受け、主に教育内容の面で英語圏の大学を評価して進学に至っている。実際に進学した6名のうち4名が小規模なリベラルアーツカレッジを選択していることは、その結果として自然である。近年の海外進学ブームでは世界の大学ランキングや知名度への言及が目立つが、高校交換留学体験者の場合にはそのような傾向が見られなかった。今後は、留学非体験者の《国内では不十分と判断》する材料も検討し、日本の高校生の海外進学選択行動をより多面的に明らかにすべきであろう。

本研究が新たに明らかにした第2の点は、「探索段階」における、高校交換留学体験が英語圏進学を促す

理由である。先行研究では、嶋内が指摘した「人とのつながり」¹⁶⁾以外、過去の留学関連体験が次の留学を促す具体的な理由がわかっていなかった。本研究は、高校交換留学体験者が自分の高校留学での成長を感じた結果、<再留学再成長を確信>し、それによって<英語圏なら国際的将来像に近づける>と考え、また<英語圏生活への自信>もその支えとなった結果、英語圏の大学が候補に入ることを明らかにした。

このような具体的背景は、海外進学や高校留学を体験していない教員が、高校交換留学体験者の立場でその海外進学動機を理解することに役立つ。本研究で見られた「成長実感」や「自信」は、高校留学中に現地の人々と深く関わり、生活を共にした体験をベースとしている。また、「国際的将来像」は高校留学前から萌芽的にあったが、高校留学で現地のさまざまな人や他の留学生と交流することでその思いが強まっていた。さらに、尚之（チリ）をはじめとする非英語圏への高校交換留学体験者の例は、非英語圏での「成長実感」「自信」「国際的将来像の明確化」も英語圏進学を促していることを示しており、高校留学での英語力向上は必ずしも英語圏進学を検討し始める条件ではない。これらの背景を知ること、教員は高校交換留学体験者の海外進学希望が単なる憧れや無謀な冒険ではないこと、英語力のみで起因するものではないことを理解し、より適切な支援へとつなげられるのではないだろうか。

5.2 実践的示唆

「決定段階」における《サポート獲得に動く》と<国内進学先も確保>は、より実践的な示唆を与える。まず、本研究の調査対象者は高校留学をきっかけに英語圏への進学を検討し始めており、周囲に海外進学に対して積極的、専門的な人がいるわけではなかった。《英語圏進学へのためらい》は当然であり、それを解消してくれるサポートは不可欠なものである。調査対象者はサポートを自ら求めに行っており、その結果、経済面だけでなく、時にはデメリットも含めて卒業後の進路までを見越した親身なサポートを得ていた。海外進学を希望する生徒に対しては、まず教員のサポートが必要だろうが、次の段階として奨学金団体等を紹介し、《英語圏進学へのためらい》の解消や、実際的なサポートを得られるように促すことも重要であるといえる。

「選考に受かって、実際に奨学金をもらえるっていう

段階になってやっと、アメリカの大学にいくっていうのが決定した」（亨、アメリカ）のように、英語圏への進学は経済的な面がネックになることも多い。奨学金に不採用なら国内で進学するというのも合理的な選択であろう。しかし、本研究では奨学金を受けずに英語圏への進学を果たそうと工夫する調査対象者もいた。例えば典子（アメリカ）は、高校卒業後1年間日本でアルバイトをして資金を作ってから再渡米した。また夏帆（中国）は、高校卒業後、高校の教員から紹介されてオーストラリアの姉妹校で日本語教師のアシスタントとして働き、いずれその地で進学することを考えていた¹⁹⁾。資金面で悩む生徒に対して、教員は奨学金以外にも資金調達のアイデアを柔軟に持っていたい。

最後に、<国内進学先も確保>についてはより多くの事例を検討する必要がある。本研究は日米併願者だけに注目したものではないため、日米併願という行動は、高校交換留学体験者の英語圏進学プロセスを説明する1ピースとして見出されたにすぎない。すでに、日米併願や国内大学入学後の海外進学は珍しくないことが指摘されており²⁰⁾、今後そのようなケースが増えていくならば、それを選択する行動や最終的に入学校を選択する行動についても、理解を深める必要がある。

6 おわりに

本研究は、高校生の海外進学選択行動を、高校交換留学体験者が英語圏への進学を検討する場合に絞って説明した。海外進学選択行動をより多面的に理解するためには残された課題も多い。まず、海外進学を検討しなかった高校交換留学体験者の進路選択プロセスの解明が挙げられる。高校留学で類似の体験をしているとすれば、多数派はなぜ海外進学を検討しなかったのかという疑問が生まれる。また、高校交換留学以外のきっかけで海外進学を志すようになった高校生の進路選択行動についても、検討が必要である。さらには、本研究が示した各概念が出現しやすい条件の量的検証など、発展的な課題も残されている。

高校交換留学体験者は、単純な憧れやランキング上の優劣ではなく、高校留学での体験に基づいて英語圏への進学を希望し、選択していた。調査時点で、海外進学した調査対象者の大学生活への満足度は高く、日本の高校生に向けて海外進学の説明会を実施している人もいる。進学先の選択肢が海外にも広がろうとして

いる現在、無数の可能性の中から満足できる1つの進学先を選択していくことは、これまで以上に難しい作業となると考えられる。進路指導においては、単に海外進学を勧めるのではなく、また手順に関して情報提供するのみでもなく、高校生が納得できる進学先を選択できるよう支援していく必要がある。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 14J07255 の助成を受けた。

注

- [1] 「広い知見に基づき、年齢に適する進路決定のための個人のレディネス」を指す概念。
- [2] 大学生の「交換留学」とは異なる点に留意のこと。
- [3] 高校交換留学を主催する団体を「交流団体」と呼ぶ。
- [4] ただし、高等教育機関である専門学校などを含む。
- [5] 交流団体の1つである AFS 日本協会が同団体の高校交換留学体験者に実施したアンケート²⁹では、海外進学者は7% (回答者344名中) であった。
- [6] 交換留学から帰国した際、出発時の学年から進級したか原級に留まったかを表す。各校の規定等による。
- [7] 本稿では experience に当たる語として「体験」を用いるが、調査対象者の発言はそのまま表記する。
- [8] ここまでの段階で、千夏 (アメリカ) と「(アメリカへの進学は) そんな意味がないんじゃないかな」と思った貴広 (アメリカ) が海外進学をやめている。
- [9] 夏帆はオーストラリアの日本人教員の姿を見の中で、「日本人として立派な大人になりたい」と考え、日本の大学への進学を決意して帰国した。

引用・参考文献

- 1) 横田雅弘. (2012). 日本における留学生受入れの現状と展望. 学術の動向, 2012年2月号, 74-82.
- 2) 全国100進学校海外名門大合格実績 2014. サンデー毎日, 2014年5月11・18日号, 68-73.
- 3) 共育社会をつくる (中). 日本経済新聞, 2017年6月15日.
- 4) グローバル人材育成推進会議. (2012). グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議審議まとめ). <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2017年6月30日参照)
- 5) 県全体で生徒の海外進学の夢を叶える熊本県の取り組み. GTEC 通信, 96. <http://www.benesse-gtec.com/fs/gtecmag/96-00> (2017年6月30日参照)
- 6) リクルート進学総研. (2017). 「2016年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」報告書. <http://souken.shingakunet.com/research/2016shinrohokoku.pdf> (2017年6月30日参照)
- 7) 高崎朋彦. (2013). 海外進学の研究. 東京学芸大学附属高等学校紀要, 50, 71-78.
- 8) 松村明 (編). (2006). 留学. 大辞林第三版(p.2671). 三省堂.

- 9) 松村明 (編). (2006). 進学. 大辞林第三版(p.1282). 三省堂.
- 10) 望月由起. (2007). 進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪: 高校進路指導の社会学. 東京: 東信堂.
- 11) King, S. (1989). Sex Differences in a Causal Model of Career Maturity. *Journal of Counseling and Development*, 68, 208-215.
- 12) 中西祐子. (1998). ジェンダートラック: 青年期女性の進路形成と教育組織の社会学. 東京: 東洋館出版社.
- 13) 応用社会心理学研究所 (編). (2014). 高校生から見た大学の「価値」と大学選びのメカニズム. 京都: ナカニシヤ出版.
- 14) 小柳志津. (2002). 留学大衆化のなかの在豪日本人留学生: 留学動機と成果を中心に. 留学生教育, 7, 27-38.
- 15) Altbach, P. G. (2004). Higher Education Crosses Borders: Can the United States Remain the Top Destination for Foreign Students?. *Change*, 36(2), 18-24.
- 16) 嶋内佐絵. (2014). 何故、英語プログラムに留学するのか?: 日韓高等教育留学におけるプッシュ・プル要因の質的分析を通して. 教育社会学研究, 94, 303-324.
- 17) 野口剛. (2009). 京都大学生における留学志向の三層構造とその規定要因. 京都大学国際交流センター (編), 京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起: 第3回アンケート・インタビュー調査報告書(pp. 91-104).
- 18) 河合淳子. (2011). 大学における学部学生の留学促進. 留学交流, 2011年5月号, 1-12.
- 19) ウェンドフェルト延子. (2009). グローバル時代の大学進学: 加藤学園暁秀高等学校における進路指導. 留学交流, 2009年7月号, 18-21.
- 20) 文部科学省. (2017). 平成27年度高等学校等における国際交流等の状況について. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/06/1386749_27-2.pdf (2017年7月11日閲覧)
- 21) 下川泉. (2005). 求められる高校生留学プログラムの意義と在り方. 留学交流, 2005年12月号, 14-17.
- 22) 全国120進学校海外名門大合格実績. サンデー毎日, 2015年5月31日号, 62-67.
- 23) 全国147進学校海外名門大合格実績. サンデー毎日, 2016年7月24日号, 68-73.
- 24) AFS 日本協会. (2017). AFS 年間派遣プログラム 2018年派遣 プログラム案内. 東京: AFS 日本協会.
- 25) 木下康仁. (2007). ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 東京: 弘文堂.
- 26) 山崎浩司. (2016). M-GTA の考え方と実際. 諸富祥彦・末武康弘・得丸智子 (さと子)・村里忠之 (編著), 「主観性を科学化する」質的研究法入門(pp. 57-69). 東京: 金子書房.
- 27) 山内太地・本間正人. (2016). 高大接続改革: 変わる入試と教育システム. 東京: 筑摩書房.

受付日 2017年7月11日、受理日 2017年9月10日